OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	幕末維新期の陵墓管理・祭祀の基礎的研究
Author(s)	上田, 長生
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49110
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【14】

氏名	上田長生（うえだひさお）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　２１６７７　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	**幕末維新期の陵墓管理・祭祀の基礎的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　村田　路人 （副査） 教　授　梅村　　喬　　准教授　飯塚　一幸

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、幕末・維新期における陵墓修復・管理事業を、特に地域社会の動向に留意しつつ検討したものである。本論文は、序章と７つの章、および終章から成り、７つの章は２部に構成されている。全体の分量は、400 字詰原稿用紙に換算して約 552 枚である。

序章では、幕末・維新期における陵墓修復・管理事業についての研究史を概観したうえで、各時期の段階差に留意し、陵墓修復・管理事業が実施された村や地域社会の動向を、管理を担った人々の内在的論理に即して検討することが、本論文の分析視角・方法であると述べている。

第一部「陵墓管理制度・祭祀の形成過程」では、主に国家による陵墓政策という側面から陵墓を検討している。第一章「幕末維新期の陵墓・皇霊祭祀の形成」では、以下の諸章における分析の前提として、陵墓がいかなる政治的・思想的文脈において浮上し、陵墓・皇霊の祭祀がどのように行われるようになったのかを整理している。第二章「幕末期における陵墓管理制度の形成」は、文久の修陵事業のあとに設けられた、地元有力者たる長・守戸による陵墓管理制度の実態と、それが地域社会にもたらした影響を明らかにしたもので、陵墓の存在が地域社会に利益をもたらしたこと、当該期の陵墓管理制度は、当時の身分制や地域社会のあり方に規定されていたことなどを指摘している。第三章「維新期陵墓政策の特質と展開」は、維新政府の一部局で陵墓政策を担った諸陵寮の組織およびその政策課題を明らかにするとともに、維新期において、陵墓の神仏分離と、長・守戸の廃止による村・地域社会の規定性の払拭が意図されたことを論証している。

第二部「陵墓管理・祭祀と村・地域社会」では、地域社会の側に視点を据えて、幕末・維新期の陵墓管理を検討している。第一章「陵墓管理・祭祀と村社会－飯豊天皇陵の事例－」は、大和国葛下郡北花内村にある飯豊天皇陵の陵墓管理をめぐる村社会の動きを取り上げ、文久の修陵事業により、地域における神々信仰に優越するものとして、新たに皇霊祭祀が位置づけられたこと、陵墓管理は地域社会において利益誘導的性格を有し、地域の特定層が積極的に陵墓管理に関わろうとする動きがあったことを明らかにしている。第二章「『聖域』の形成－開化天皇陵の事例－」では、大和国奈良町の開化天皇陵にあった念仏寺墓地・畑地が、文久の修陵事業で移転させられた事例を検討し、幕末期に陵墓の「聖域」化が図られたこと、修陵後、陵墓管理に関わろうとする念仏寺の動きや、修復請負によって利益を得ようとする商人の動きが見られたことを紹介している。第三章「陵墓管理と地域社会－山陵奉行用達と守戸組合－」は、山陵奉行など、幕末期に新たに登場した政治権力が地域社会に介入したことに対する地域社会の反応・動

向を、河内国の陵墓の管理に関わった山陵奉行用達および守戸組合のあり方を手がかりに検討したものである。第四章「朝廷『権威』と在地社会」は、山城国紀伊郡堀内村にある崇光天皇陵の修陵・陵墓管理を取り上げ、天皇・朝廷の「権威」は、「権威」受容者によって、数ある「権威」の中から選び取られたものであったことを明らかにしたものである。終章では、各章のまとめを行っている。

論文審査の結果の要旨

幕末・維新期の修陵事業および陵墓管理制度については、幕末・維新期の政治過程との関わりや、それらが周辺地域に与えた影響、あるいは近代における天皇制イデオロギーの民衆への浸透との関わりといった側面から研究が行われてきた。また、古墳形状の改変という側面に注目した考古学的研究もある。しかし、従来の研究は、幕末・維新期の陵墓政策の限られた側面を取り上げたもので、その全体像を解明したものはない。本論文は、宮内庁書陵部に保存されている政府文書や、陵墓近在の村に残された村方史料、あるいは寺院史料などを博捜し、政策の実施過程と地域社会側の対応という二つの側面から、全体像を描き出すことに成功したものである。本論文は、当該テーマについての、現段階における最も体系的・包括的な研究といってよい。本論文の意義として、まずこの全体像の提示という点をあげることができる。

また、本論文では、とりわけ陵墓政策と地域社会との関わりという視角を重視し、検討が行われている。この分析視角を用いることによって、修陵事業や陵墓管理制度の創設が、村や、村を超えた地域的広がりにどのような影響を与えたのか、地域社会はそれにどのように対応したのかが明らかになった。特に、陵墓管理に関わることで利権を得ようとする動きや、村内での社会的地位を上昇させようとする動きが地域社会で見られたことを明らかにしたことは、特筆に値する。また、申請者の研究は、修陵事業や陵墓管理制度の創設によってあぶり出された幕末・維新期畿内地域社会の特質を的確に捉えたものであり、幕末・維新期畿内地域社会論に対する方法論的提起ともなっている。

その他、近世後期以降維新期までの陵墓政策を段階的に把握したこと、陵墓を一括してとらえず、河内・大和・山城のそれぞれの陵墓の差異を念頭において検討したこと、明治新政府の諸陵寮の組織や政策課題を、新史料を用いて解明したことも意義深い。

もちろん、本論文にも問題がないわけではない。近世後期に陵墓が注目されるようになる思想的背景の分析は浅いものにとどまっているうえ、近世後期以来、地域社会において広汎に展開しつつあった復古的潮流と、陵墓管理制度導入に対する地域社会の対応との関連も、明らかにされていない。また、陵墓や陵墓参考地の様態による地元の対応の多様性という問題については、なお検討の余地を残している。しかし、これらの問題点は、本論文の価値に較べれば、小さなものというべきである。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。